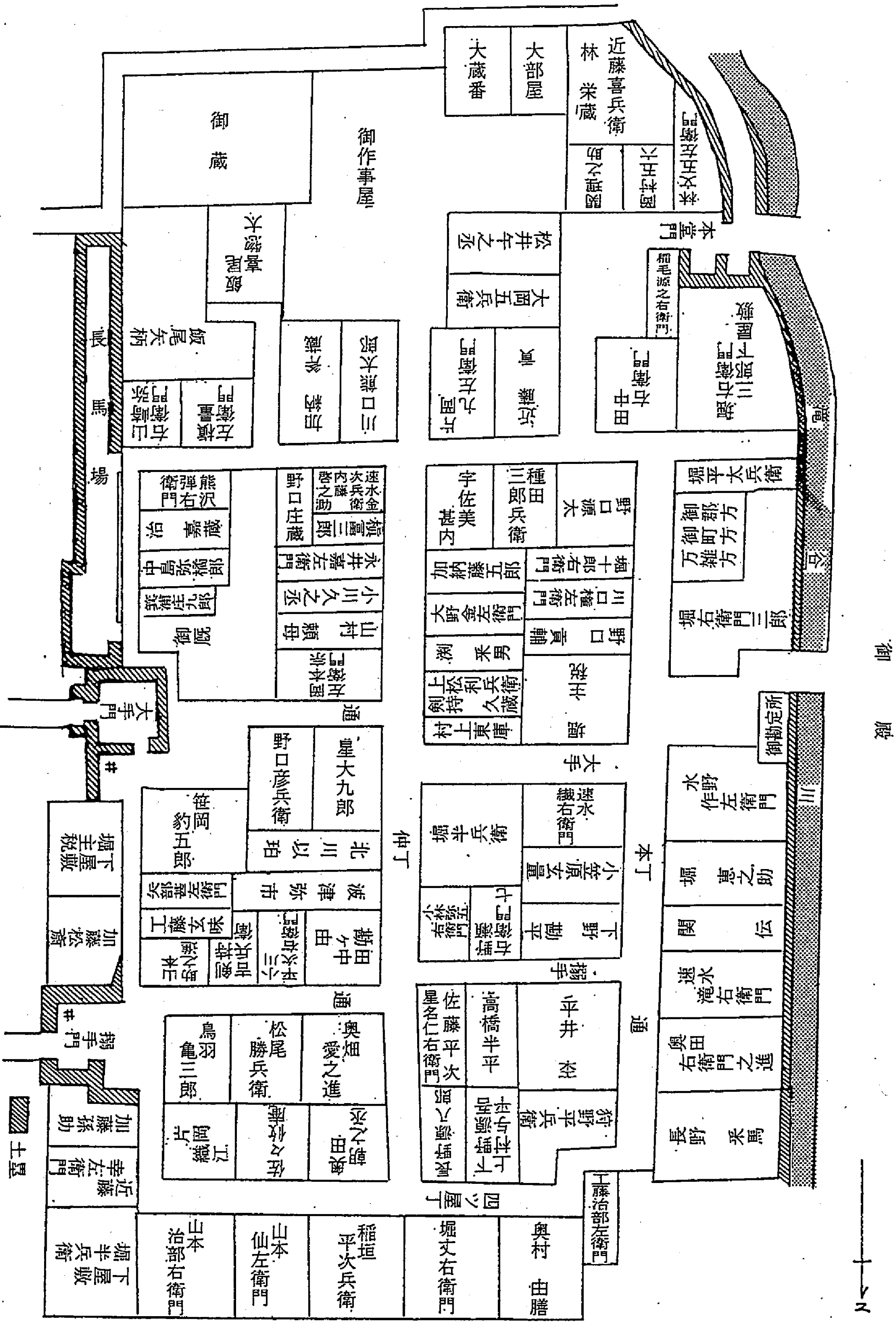

図55　安政年中の丸の内図

表77　城下絵図よりの戸数一覧表

			元禄絵図	宝暦絵図	寛政絵図
藩士戸数	丸の内		90戸	101戸	100戸
	西丁		150	167	164
	東丁		99	191	217
	藩士合計		340	459	581
町方戸数	城町組	春日町	24	53	70
		城町	27	52	68
		合計	51	105	138
	上町組	上町	42	57	58
		中町	14	18	21
		合計	56	75	79
	下町組	下町	39	48	53
		横町	23	27	27
		袋町裏町	23	31	35
		合計	85	106	115
		寺院	12	12	12
		山伏	4	4	4
		神主	1	1	1
	町方合計		208	303	349
総合計			548	762	930

〔備考〕下屋敷，長屋内の戸数は含まれていない。町方にも家中が居住しているが藩士戸数に含めていない。

安政絵図　幕末の「丸の内図」（図55）がある。これを検討すると「堀恵之助は、堀善左衛門養子で万延元年より藩主直賀となる人である。「鳥羽亀三郎」は、鳥羽忠兵衛養子で安政元年相続して文久二年病死する。「佐々攸庵（いうあん）」は同家三代目の隠居名で安政五年病死した。「水野作左衛門」は、安政三年まで本図の狩野平兵衛屋敷に居住し、同四年より本図の地に引移る。以上四点より本図は安政四、五年に作成されたと推定される。また「村松藩藩士住居町

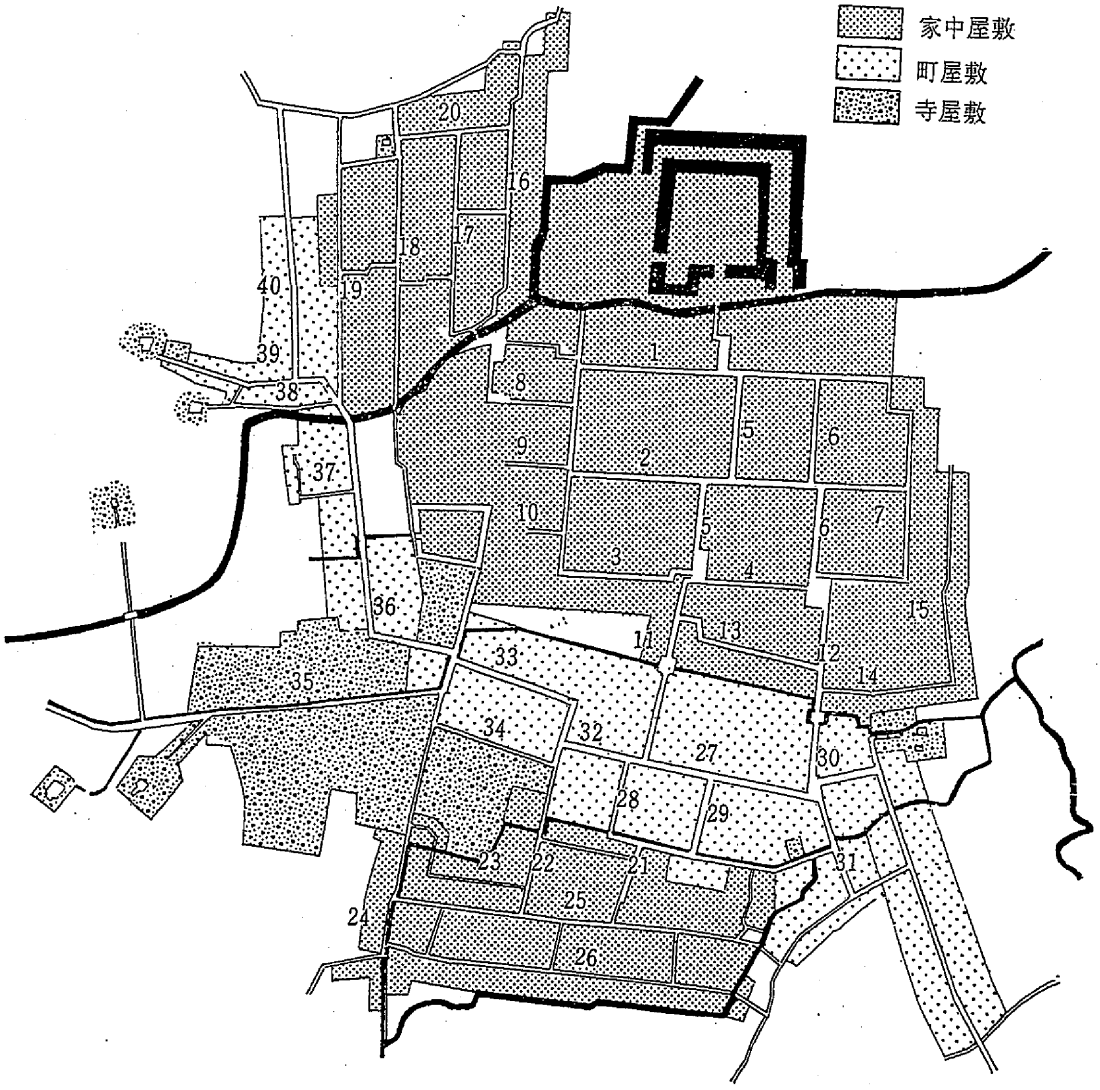

図56　幕末期の村松町の概略図

名名簿控帳」は慶応二年作成とされるが、同帳の家中屋敷は、嘉永年中六軒丁の延長上に新設された新丁が見え、同所には卒分が多く居住する。また新町東部に現在の村松高校裏門に至る小路が新設され卒分が居住し、根木町、宝町北部に卒分の屋敷が増加している。

戸口の推移

絵図より見た戸口の推移は表77のようになる。町の中にある家中屋敷の割合は元禄期は六二パーセント、宝暦絵図では六〇パーセントとなり、寛政絵図では根木町、宝町の増加で六二パーセントになる。以後幕

表78　幕末期の村松町名

丸の内（御門内）	① 本丁通り	西丁	⑯ 御徒士町	町組	㉙ 親方小路
	② 中丁		⑰ 長柄町		㉚ 横町
	③ 馬場丁		⑱ 本堂町		㉛ 袋町
	④ 源太小路		⑲ 片町	上町組	㉜ 中町
	⑤ 大手通り		⑳ 横丁		㉝ 上町
	⑥ 搦手通り	東丁	㉑ 裏町		㉞ 裏寺
	⑦ 四ツ屋丁		㉒ 鍛冶丁		㉟ 寺町
	⑧ 本堂門通り		㉓ 九軒丁	城町組	㊱ 城町
	⑨ 作事門通り		㉔ 新町		㊲ 搗屋小路
	⑩ 鑓場丁		㉕ 根木町		㊳ 薬師小路
	⑪ 大手門外		㉖ 宝町		㊴ 春日小路
	⑫ 搦手門外	下	㉗ 下町		㊵ 新城町
	⑬ 桐林		㉘ 高札小路		
	⑭ 六軒丁				
	⑮ 新丁				

末までの総数把握は困難であるが、安政三年「御家中御役武鑑」（『村松郷土誌』創刊号）では五五四戸。「幕末村松藩士住居町名名簿控帳」の七六七戸と地足軽、寄組の町方居住者を加えても七八七戸程である。戊辰戦争では家臣の二、三男を多数召抱えたので明治二年調では藩士数一一〇二名、戸数八二四戸であった（「明治二年藩政一覧」）。その後整理されて明治五年の藩士総数八二九名となっている（『町史資料編巻二』）。

町方屋敷は、表77のように以後漸増勢をたどり明治初年には町屋敷戸数は七七五戸となる。寛政絵図より増加分四三〇余戸は、下町裏の裏町東側、上町裏の裏寺、寺町に建てられた借屋層、零細民の増加であるが、町屋敷が占める比率は四八・五パーセントである。

近世の人口構造の研究によると、先進地帯の城下町は商工都市化し、藩士は町人より少ない。ところが村松町は、幕末になっても藩士戸数が多く、町屋敷が少数になっている。村松町は封建的な後進地帯であったといえる。